

【61】昆虫、医療、土木

丁度3年前の12月の事になりますが、戦乱のアフガニスタンで、日本人医師の中村哲氏が暗殺され、大きなニュースになった事は記憶に新しいところです。

中村医師は昆虫が趣味で、そもそもアフガニスタンへ出かけたのはモンシロチョウの起源を探ることでしたが、彼が医師であることから現地の人の中村氏に診てもらうようになり、そのあまりのひどさに腰を据えて診療所を開くハメになったと、同じ医師で昆虫採集が趣味の養老孟司先生が言っておられます。(2008年1月6日毎日新聞)

しかし、次から次へと押し寄せる大勢の病人を診療しているうちに、一人や二人の医師のやる事には限界があり、社会の根底から立て直さねば病人は減らない、とくに長期にわたる旱魃で農村が疲弊していることが病気や戦乱の原因であると考え、その解決のために河川から荒れた農地へ灌漑水路を開くことを思いついたのです。そのスローガンは、“百の診療所より一つの水路を”です。そして独学で土木を勉強し、故郷の筑後川の取水堰を参考にし、自分で堰や水路を設計し、ショベルなどの重機も操作し、大勢の現地の人々の協力を得て用水路を完成させ、数十万人の人々に生活の安定をもたらしたのです。

私は、土木に全く縁の無かった中村医師が、病人の多発が旱魃にあり、その解決には水不足を解決するインフラが必要だと見ぬき、ゼロから出発して土木事業を展開したというところに、土木の原点があると改めて教えられショックを受けました。

中村医師は、自衛隊の海外派遣が国会で議論されたとき、参考人として反対意見を述べたため一部の政治家からは疎んじられたようですが、非業の死を遂げられた後では、その功績の大きいことが認識され、日本の誇る偉人として敬意を集めています。

中村医師の活動を背後から支えてきたボランティア組織に“ペシャワール会”がありますが、令和4年の日本水大賞に輝きました。関係者の一人としては、もっと早く、中村医師がお元気な時に授賞されればよかったと残念に思う次第です。